



カフジにはイラク軍が一時侵攻し、91年1月30日から2月1日にかけて地上戦が行われた。〔「アラビア石油 35年の歩み 湾岸危機を乗り越えて」より〕

短期集中連載

被弾した鉱業所から必死に避難 臨戦の現場と平和な日本

岡本 文夫

元衆院議員秘書

サウジアラビア・クウェート国境地帯にあるカフジのアラビア石油鉱業所にいた我々は、1991年1月17日の湾岸戦争開戦まで、サウジ政府の厳命に従い操業継続の覚悟を固めるしかなかった。しかし北18キロのクウェート国境まで進出したイラク戦車軍団がいつ侵攻してくるかもしれないとの恐怖は片時も脳裏を去らず、従業員に耐え難い重圧をかけ続けた。

筆者の関知するところでは、当初サウジのテレビは通常番組を中止し、コーランの朗詠や映像なしのアラブ音楽を流すだけだった。サウジ政府が断固としてイラクの暴虐を批判して撤退を迫ったのは、米軍の援軍第1陣が到着してからだったと記憶する。祖国が直面した未曾有の危機に対して、駐米大使のバンダル王子は獅子奮迅の外交を続け、ブッシュ米大統領にサウジへの派兵を要請するとともに、イスラムの聖地たるサウジへの他国の軍隊導入に反対する指導者たちの説得に当たった。

かくしてイラクのクウェート侵攻（1990年8

月2日）という危機勃発から1週間足らずで、米軍F15戦闘機と第82空挺師団の即応旅団が派兵第1陣としてサウジに到着した。一方、ペーカー米務長官の精力的外交により国連は多国籍軍結成を決議するに至る。その空前絶後の大軍備は、サウジの砂漠の中に着々と展開されていった。

一方、カフジの我々は不十分な情報のもとに、固唾を飲んで事態の推移を見守った。カフジ周辺の国境地帯に事前の緊張は全く見られなかった。軍事拠点といえば、カフジ南方40キロにミシャブという小規模な海軍基地があるだけで、イラク軍が米軍到着までの6日間に一挙に国境を越えていれば、あたかも無人の野を行くが如くにサウジの石油生産の大半を占める東部地区の占領は十分可能だったのではないか。平坦な砂漠には、片側3車線のハイウェイが走っていて、侵攻する場合の交通インフラは整い過ぎているほどだった。

我々にしてみれば、このシミュレーションを考えるとカフジは侵略の最初の通過点であり、その



展開するサウジ地上軍（出所＝同）

恐怖は計り知れない。サダム・フセインのサウジ侵攻の野望が未遂に終わったのは、バンダル王子の外交が奏功して米軍の到着が迅速だったこと。1年前までイラクと8年間闘ってきたイランが脇腹を突く懸念と、イラクの背後には敵対するイスラエルが控えている軍事地理的条件があったからだろう。後になってそう推察したが、当時はそんな余裕もなく、我々にとっても米軍の到着はひたすらありがたかった。

会社開闢以来最大の危機に際して、現地政府に対する一進出民間企業の関係は片務的なものだ。撤退が許されない以上、残念ながら本社の支援は現場から見れば限定的に感じざるを得なかった。

「弔意金は税込み？ 手取り？」

本社は、万が一死者が出た場合、遺族に1億5千万円の弔慰金を出すことも提示した。これは両刃の剣の逆効果だった。「死んだ場合の想定などとは不謹慎甚だしい。死者を出さない方策を考えるのが会社だろう！」

すでに精神の平衡を失っていた若手が、ありったけの勇気を振り絞って質問した。「そ、それは、税込みでしょうか。手取り額でしょうか？」。説明会出席者全員の間で、力のない失笑が湧いた。

国連がイラクに撤退期限を通告した頃、本社から送られてきたのは、映画で見た米兵が胸に下げている金属製のプレート（認識票）だった。「なるほど、これさえあれば黒焦げやバラバラ死体になっても、認識は可能だろうぜ」。筆者は呆れ果てた。

我々を一番悩ませたのは、日本の家族から毎日かかってくる国際電話だった。「会社なんか辞めて逃げてきて下さい！」。パスポートすら手許にない状況で、安全元気を強調するしかない、かみ合わない対話に胃袋がねじれる苦痛を感じたのは、筆者ひとりではなかった。

また、戦争突入寸前には、サウジ政府の指導で、毒ガスマスクが支給された。不気味なお面はチェコスロバキア製だ。なるほど、昔ドイツ軍の毒ガス被害にあった国には、こういう産業が育つのかと改めて認識した。カートリッジの活性

は15分限り。無色無臭のサリンを撃ち込まれたら、いつ装着すればよいのか誰にも分らない。絶対にこんなもののお世話になってたまるかと思ったものだ。

危機勃発から開戦に至る5カ月半の間には、重圧に負けた従業員もいたのはやむを得ざる結果だった。口もきけない重度のノイローゼに陥り現場を去った者。休暇帰国して医者診断書をFAXして、再び現場に戻らなかった者。実家の事業で仕事に困らない者は休暇を取ったまま逃亡。会社の自主的事業方針で操業継続している体裁で、自治権を確保しているからこそ、平常通りに休暇取得できるという認識にいる筆者には、休暇行使したまま職場放棄するのは極めて卑怯な行動に思えた。これが続発するなら自治権の喪失に繋がりがかねない。幸いにして、これらの事例は数名に止まった。苦難に耐えながらも事業存続の使命感と心意気をもって現場を死守する男達が、まだ多数を占めていた事実が、最後まで自治権を維持していたのだ。

平和な日本の「神学論争」

90年11月。日本の国会では、国連から強く求められた中東貢献策を巡り、国連平和協力法案が審議された。本社から毎日送られるFAX情報でその経過を知る我々は、平和な日本で行われている『神学論争』に苛立った。その結果、日本は人的物質的貢献を行わず、石油臨時特別税制定により、国民一人1万円の拠出に当たる総額130億ドルの資金支援のみに終わった。

筆者が起居する单身寮の自室は、通称「岡本亭」と呼ばれる溜まり場であり、お互いを励ますとともに情報共有や議論の場であったが、集まった男達は激怒した。「我々が命を張って残留せざるを得ないのに、平和ボケした日本は何をやっているんだ！ 武装がダメなら、砲塔を外した護衛艦でもカフジ沖に浮かべてみろ。確実な脱出ルート確保が、どれだけ我々を励ますことか！」

翌91年1月17日の湾岸戦争突入の前日夕刻、ナーゼル石油大臣の最大の配慮と推察される「明日早朝、何か連絡を入れるかもしれない」という謎めいた電話が石油省からもたらされた。その時点での残留日本人従業員48名は、攻撃を受けた場合、先ず手近のシェルター（防空壕）に潜り、状況を見て海路か陸路で退避する事を申し合わせた。海路退避の際は、原油出荷作業用の船舶5隻を指定してあり、アラビア湾を南下して在アブダビのAHI（IHIの現地法人）を頼るつもりだ。陸路の場合は、筆者始め健常者14名が同僚を乗せて、300キロ南のダンマンまで退避する予定だった。

妻から「逃げて！」の電話

開戦の急報を告げたのは鉱業所の緊急連絡網ではなく、妻からの国際電話だった。「あなた、始まったわよ！ 直ぐに逃げて下さい！」。筆者が直ちに取った行動は、最後まで引きずってしまったサウジ人部下2名への退避命令だった。

30名いる部下は、既に気の弱い順に逃散していたが、熱心な柔道の弟子でもある忠実な部下2名は最後まで付き従った。筆者が緊急電話を入れると、嬉しいことに両名はまだカフジに止まっており、直ちに脱出させた。部屋を出ると既に砲撃が始まっており、轟音が筆者を包み、目前に着弾の砂柱が立った。皮肉なことに、筆者には同時に相矛盾する感情が閃いた。「殺される！」という究極の恐怖と、解放への祝砲だ。我々が集団脱出しても現場に連れ戻す者はもう存在しないのだ。

6時間に及ぶ猛砲撃で鉱業所は被弾破壊されたが、象徴的被害はCNNが世界に配信した猛然たる黒煙とともに炎上する100万バーレルの原油タンクだった。やっとな国籍軍のファントム戦闘機3機が超低空で砲撃拠点へ反撃に向かい、イラク軍の攻撃が止んだ。我々は直ちに陸路を脱出

した。着弾が始まって間もなく、退避用船舶のフィリッピン人クルーは自分達の命を守るために逃亡していたからだ。時速200キロを超える高速運転で脱出しながら、筆者は40キロ南のミシャブ海軍基地の手前に、数十両の戦車が配備されているのを見た。多国籍軍の前衛線はまさにここだったのだ。「なんだ、これは！ 我々は、最前線より前で働かされていたんじゃないか！」

退避先のダンマンで遭遇したのは連日深夜のミサイル攻撃だった。イラクの軍事力を確認した我々は、陸路アラビア半島を横断してジェッダに向かったが、戦争当事国への有力航空会社の乗り入れは既に停止。漁船を借りて紅海を渡り、アフリカ大陸へ渡ることも検討したが、対岸はイラクと同盟しているスーダンであり安全の保証が得られない。窮余の末辿り付いたのが、王族用のチャーター機を高額で借りることだ。アテネまで飛んでオリンピック航空に乗り継ぎ、やっとな家族の待つ日本にたどりついたのは、開戦後12日目のことだった。

後に、筆者はアラビア石油を早期退職して、国政の裏方業務に転進した。

湾岸戦争終結の条件として、イラク政府には大量破壊兵器廃棄が義務付けられていた。これを順守しようとしなかったサダム・フセインに対し、米国は再び宣戦布告。これが「イラク戦争」と呼ばれ、フセイン政権は駆逐された。2003年のイラク戦争終了後、新生イラク政府の人道復興支援のための国際貢献に参加して、サマワに赴いた陸上自衛隊の指令官を務めた後、参議院議員となった「ヒゲの隊長」佐藤正久議員と対話する機会を得た。10数年前の切歯扼腕を語る筆者に、「あの時、我々が皆さんを助けに行ったらあげれば良かったんですよ！」。遙か昔の戦争体験に対する超法規的激励ではあったが、こういう日本人がいてくれさえすれば、まだ日本も救われると嬉しく感じたものだった。



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆議院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。